防災講演会　「3.11を学びに変える」

スマートサプライビジョン　特別講師　佐藤 敏郎 氏

文責　校長　山下　尚子

「大きな地震が発生しました。速やかに校庭に避難してください」。誰もが一度は経験したことのある、避難訓練のアナウンス。私たちはこれまで何度も、机の下に潜り、防災頭巾をかぶり、「お・か・し・も」の約束を守って避難する練習を繰り返してきました。それは、万が一の事態に備えるための、当たり前の「備え」でした。

しかし、本当に命が脅かされる巨大な災害が訪れたとき、本当に大切なことは何でしょうか。

１０月１日、元中学校国語科教師であり、東日本大震災の被災者でもある佐藤俊郎先生の言葉をもとに防災について考えました。想像を絶する悲しみと向き合い続けた佐藤先生だからこそ語れる、命を守るための本質的な考え。それは、私たちの心に深く響くメッセージとなりました。

---

1. 「訓練のための訓練」では、命は守れない

佐藤先生が勤務していた中学校では、これまで100回以上も避難訓練が繰り返されていました。しかし、2011年3月11日、本物の巨大地震が襲ったとき、その訓練はほとんど役に立ちませんでした。想定されていた手順が、いとも簡単に崩れ去ったのです。

まず、生徒に避難を呼びかけるための校内放送が使えませんでした。巨大な揺れで停電になったからです。そして、訓練で繰り返し使っていた体育館脇の避難経路は、割れた窓ガラスが大量に散乱し、通ることができなくなっていました。皮肉なことに、学校は高台の上にあり、津波そのものからは安全な場所でした。それにもかかわらず、地震の最も基本的な副産物に対応できなかったのです。

「停電になる」「ガラスが割れる」。それは巨大地震が起きれば当然起こりうる、ごく当たり前のことです。しかし、これまでの訓練では、その「当たり前」がすっぽりと抜け落ちていました。なぜ、こんなにも簡単なことを想定できなかったのか。佐藤先生は、今もなお、その想像力の欠如に戸惑いを感じると言います。

「こんな簡単なことを想定してなかった。何十年も私は100回以上学校で避難訓練に子供時代から含めてやってましたけども、こんな簡単なことやってなかった。なんでだろうね。」

---

2. 命を救うのは「モノ」ではなく「行動」である

多くの児童と教職員が犠牲になった、石巻市立大川小学校の悲劇。地震発生から津波が到達するまでには、51分もの時間がありました。学校のすぐ裏には、子どもたちが普段から活動で使っていた避難可能な山がありました。エンジンのかかったスクールバスも待機していました。ラジオからは津波の情報が流れ、住民も必死に避難を呼びかけていました。助かるための条件は、これ以上ないほど揃っていたはずでした。

この事実から、佐藤先生は一つの痛烈な結論にたどり着きます。それは、命を守るための「モノ」や「情報」があっても、それだけでは命は救えないという、真実です。

「山は命を救わない。… 命を救うのは山ではなく、「登る」「逃げる」っていう行動が命を救う。バスが命を救うんじゃないんだ。ハザードマップは津波を止める壁になるわけじゃないんだよ。」

そこには、命を救うための「モノ」がすべてありました。しかし、たった一つだけ、決定的に欠けていたものがありました。それは、「行動する」という、あらかじめ定められた意思決定です。大川小学校の悲劇は、あらゆる手段が揃っていても、決断が麻痺してしまえば無価値になるという「機能停止の悲劇」でした。助かるための手段を持つことと、実際に助かることは同義ではないという、重い教訓を私たちに突きつけています。・・・佐藤先生は、大川小にいた末娘のみずほさん（小6）を失いました。

---

3. 言葉を失った生徒たち　しかし、「定型」で表す俳句から行動が始まった

震災後、佐藤先生が向き合ったのは、過酷な体験によって「言葉を失った」生徒たちでした。日常を奪われ、家族や友人を失い、心に深い傷を負った彼らに、自分の気持ちを文章に書かせることなどできるはずがない。佐藤先生は当初、授業で生徒が「気持ちを言葉にする」ことに強い恐怖を感じていました。

しかし、国語の授業で「俳句」に取り組むことを決めたとき、想像もしなかった光景が広がります。書きたくない生徒は書かなくていい、と伝えたにもかかわらず、生徒たちは一斉に鉛筆を動かし始めたのです。まるで魔法にかかったかのように、五・七・五の短い言葉を探し始めました。

- 夢だけは　壊せなかった　大震災
- 逢いたくて　でも会えなくて　逢いたくて
- 見上げれば　瓦礫の上に　こいのぼり

お母さんを亡くしたある女子生徒は、授業中に句を提出しませんでした。やはり無理をさせてしまった、と佐藤先生が心を痛めていると、彼女は次の日に句を持ってきました。「あいたくて」の句でした。彼女は言いました。「実は昨日できていたんです。でも、『あう』という漢字には『会う』と『逢う』があって、どちらがお母さんへの気持ちに合うか、ずっと迷っていて…」。五七五で表す定型が、単なる課題ではなく、亡き母への手紙を書く、神聖な行為になっていたのです。

なぜ彼らは、俳句という形でなら自分の気持ちを表現できたのでしょうか。それは、あまりに大きく、混沌とした感情を、五・七・五という「定型」が受け止めてくれたからです。そして、クラスメイトの句を読むことで、「苦しいのは自分だけじゃない」と感じることができました。俳句は、バラバラになった心をつなぎ、「一人じゃない」と思える場を生み出したのです。

そして、この言葉の回復は、終わりではありませんでした。それは、次なる行動への始まりだったのです。生徒たちは自発的に「津波の話」を始め、「二度とこの悲しみを繰り返さないために」と、新しい石碑を建てるプロジェクトを立ち上げました。言葉を取り戻した彼らは、未来を守るための行動へと力強く踏み出したのです。

---

4. 防災は「恐怖」ではなく「希望」である

「巨大地震が来たら、この街は壊滅します」「津波で多くの人が死にます」。私たちはこれまで、恐怖を煽ることで防災意識を高めようとしてきました。しかし、佐藤先生はそのアプローチに限界があると言います。人は、あまりに怖い現実を突きつけられると、かえって目をそむけてしまうからです。「まさか自分の身には起こらないだろう」「ここまで内陸なら大丈夫だろう」と、自分だけは大丈夫だと思い込むことで、心を守ろうとしてしまうのです。

そこで佐藤先生が提唱するのが、「希望の防災」という考え方です。防災とは、死の恐怖から逃れるためだけのものではありません。「防災はハッピーエンドのためにする。」

「防災って何のためにあるかっていうと、助かって喜ぶためにあるんでね。みんなで助かって喜ぶ未来。それが私たちが目指す防災が目指すところ。… 防災は恐怖ではなくて希望です。もっと言うと恐怖を希望に変えるのが防災。」

私たちが災害に備える本当の理由は、その先にある「生きたい未来」を守るためです。叶えたい夢があるから、会いたい人がいるから、続けたい日常があるから、私たちは生き抜く。防災とは、恐怖に怯える行為ではなく、自分が心から望む未来を手繰り寄せるための、前向きで希望に満ちた営みなのです。

---

5. 最大の後悔は、日常の中にある

震災後、佐藤先生の上の娘さんが綴った作文に、彼女の人生で「最大の後悔」が記されていました。それは、大川小学校に通学し、津波で亡くなった妹・みずほさんとの最後の会話についてでした。

「災害が起きたその日の朝、洗面所でみずほさんが「お姉ちゃん、おはよう」と声をかけてくれました。しかし、朝の忙しさでイライラしていた彼女は、その挨拶を無視してしまったのです。それが、愛する妹と交わした最後のやりとりになりました。ありふれた日常の中の、ほんの些細な一瞬。それが、取り返しのつかない永遠の後悔となったのです。」

お姉さんは作文にこう書いていました。「こんなに後悔したことはない」。彼女は、震災によって、それまで自分が「寄りかかっていた」日常や人間関係、未来といったものがすべて突然奪われたとき、初めて自分の弱さに気づいたと言います。「後回し」や「人任せ」にしてきた自分の姿が、むき出しになったのです。何気ない「今日」という一日を、目の前にいる大切な人との時間を、いかに慈しんで生きるか。私たちの足元にある日常の尊さなのです。

まとめ

佐藤先生の言葉は、真の「備え」とは、防災グッズの備蓄や避難経路の確認といった物理的な準備だけではないことを教えてくれます。　それは、「行動する」という意志、「希望」を原動力にするという防災の発想、そして「今」を大切に生きるという覚悟、そうした心の持ち方そのものです。

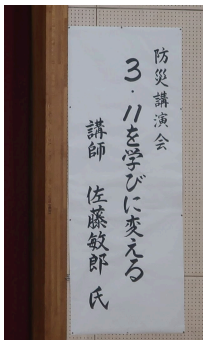
「2024年1月1日。能登半島地震。大変な被害がありましたよね。こんな新聞記事を見つけました。「この地区は5分間で全員避難した」。奇跡と言われています。でも、よくインタビューを見ると、「奇跡じゃないよ」って言ってます。「東日本大震災をきっかけに、毎年避難訓練を本気でやってたんだ。だから、住民の人たちは奇跡じゃないよ。訓練したから助かったんだ」って言って。それから「やっぱりパニックになったんだ」って。「パニックになったけれども、気づいたら避難場所にいた」っていうようなこと言ってます。みんな、目指すのはこれだよね。」

そして、佐藤先生が最後に伝えてくれたのは、子どもたちが中心になって建てた女川町の21カ所にある石碑のことでした。21箇所目に建てられた石碑には

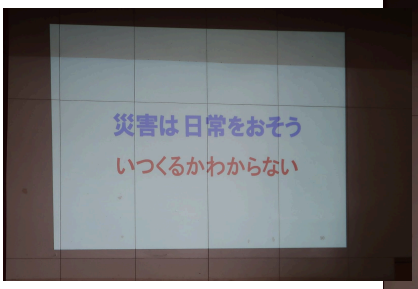
「夢だけは壊せなかった大震災」　　という生徒の俳句が刻まれました。

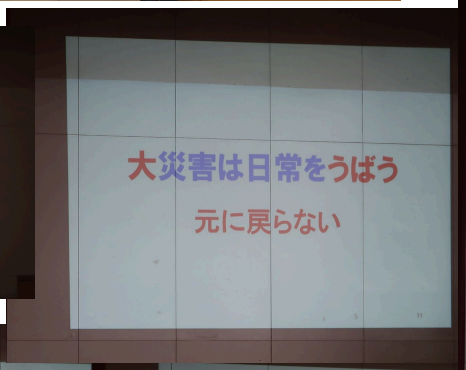
佐藤先生が伝えてくれたこと。それはいつかどこかで必ず起こるであろう未来の災害に備え、そして何より、かけがえのない今日を生きる、すべての人のための道しるべです。

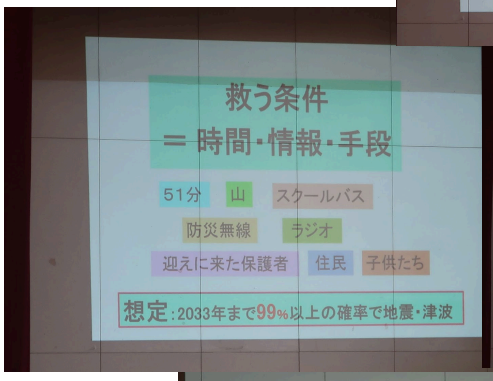
講演会のタイトル、「3.11を学びに変える」、皆さんはどう受け止め、学びに変えたでしょうか。

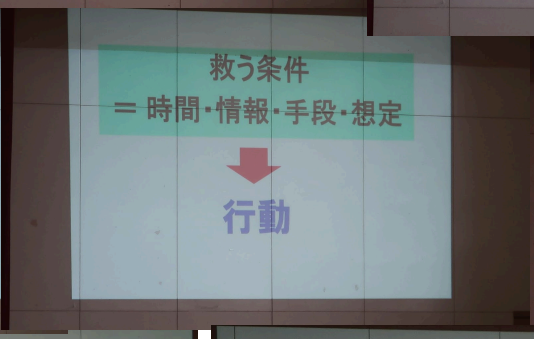

防災講演会
3・11を学びに変える
講師 佐藤敏郎 氏

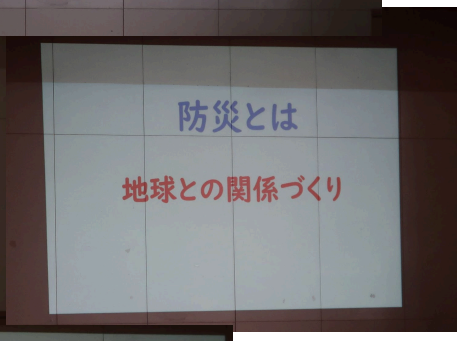
ライビジョン
の会／一社まちとこ
藤 敏郎

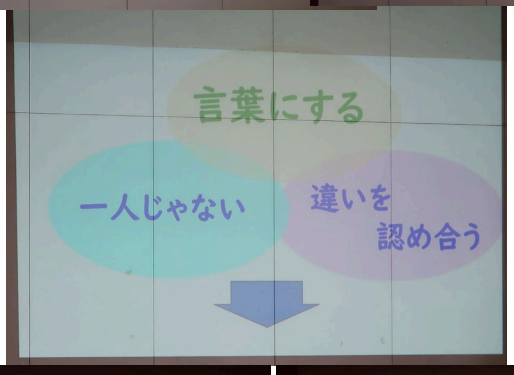

災害は日常をおそう
いつくるかわからない

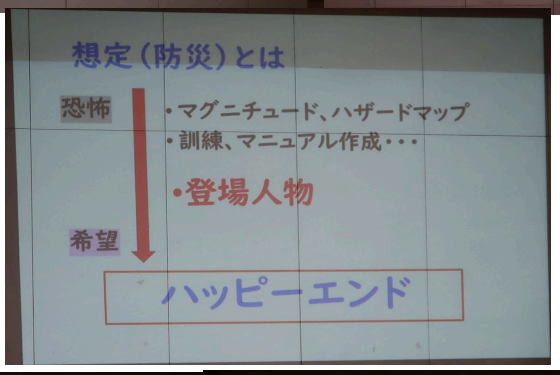

大災害は日常をうばう
元に戻らない

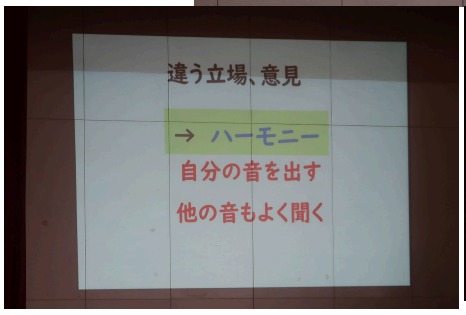

救う条件
＝ 時間・情報・手段
51分
山
スクールバス
防災無線
ラジオ
迎えに来た保護者
住民
子供たち
想定：2033年まで99%以上の確率で地震・津波


救う条件
＝ 時間・情報・手段・想定
行動

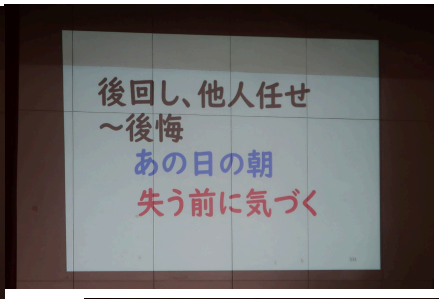

防災とは
地球との関係づくり

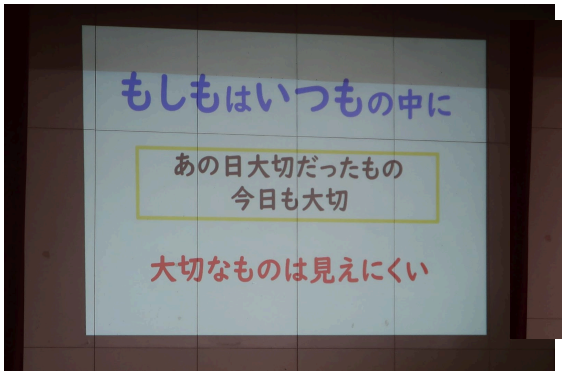

言葉にする
一人じゃない
違いを
認め合う

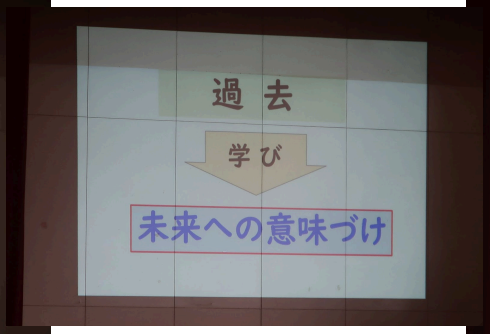

想定（防災）とは
恐怖
・マグニチュード、ハザードマップ
・訓練、マニュアル作成・・・
・登場人物
希望
ハッピーエンド

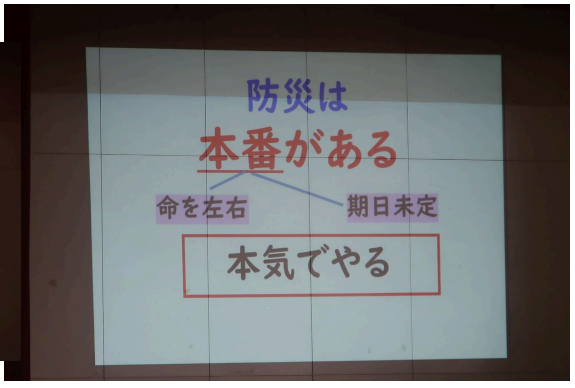

違う立場、意見
→ ハーモニー
自分の音を出す
他の音もよく聞く

垣根を越えて
命の話をしたい


後回し、他人任せ
～後悔
あの日の朝
失う前に気づく


もしもはいつもの中に
あの日大切だったもの
今日も大切
大切なものは見えにくい


過 去
学び
未来への意味づけ


防災は
本番がある
命を左右
期日未定
本気でやる